

覇権衰退とポスト覇権に関する議論

1、はじめに

田中明彦氏は、新しい「中世」論を掲げるにあたり、その兆候・理論的背景となるものとして、(1)冷戦の終結(による秩序崩壊)(2)アメリカの覇権衰退 (3)軍事的・経済的側面における相互依存の進展(4)非国家的アクターの多重的かつ多層的な権威の出現などをあげているが、ここでは2点目についての議論をまとめるとともに、検討を行っていききたい。

2、アメリカの覇権

冷戦の終結 (1,2章で検討) →70年代は盛んだった「覇権衰退論議」が衰退
…覇権衰退を多極化進展の要因としてとらえる

■覇権の語義の変遷 (late 60s - 70s)

「支配・侵略・圧迫」→「リーダーシップ・優越」

アメリカの覇権衰退から生じた通貨・石油危機などの混乱→リーダーシップのニーズ

…「国際的な秩序を維持し、基本的ルールを守るために尽力する」

= 「国際供給材を独占的に供給する」

こうした価値基準を軸にした良い超大国・良い覇権国のことを指している

国際供給材とは

- ・ 平和
- ・ 世界経済の安定
 - 自由貿易
 - 国際通貨の安定
- ・ 何らかのレジーム (明示的・非明示的行動パターン・ルール)
- ・ これら全て

そして、第一の供給材=平和は主に冷戦構造・民主主義体制がもたらしたものであり、アメリカの覇権は主に経済的供給材をもたらしたと考えられる。

- ・ 自由貿易 (留保付き)
 - アメリカの経済的影響力や GATT による多角化交渉の進展
- ・ 国際通貨の安定
 - ブレトンウッズ体制や円ドル固定相場制が経済的発展に寄与
- ・ 国際的レジームの構築
 - IMF・GATT・石油の安定供給・海洋自由の原則

3、覇権の衰退

アメリカの覇権衰退の兆候…経済的側面(60s-70s)→軍事的側面(70s-80s)

1. 経済的側面

工業の総生産・先導事業の両面におけるアドバンテージの減少

←敗戦国の経済的復興やエネルギー輸入・依存国への転落

2. 軍事的側面

- ・ ソ連の戦略核兵器の整備
- ・ ソ連の海事面での軍事力の強化
- ・ ベトナム戦争の敗戦

軍事面におけるアメリカの強大な存在にかげりが見えてきたと言える

→こうした覇権の衰退に比べて、文化的・政治的影響力=ソフトパワーは

なお保持されていた（欧米の生活様式の普及・学問における先駆的存在）

4、ポスト覇権

経済的覇権の衰退にもかかわらず、自由貿易の枠組みは崩れることなく、むしろ拡大
しかし、国際通貨体制が不安定化

→円ドルの変動相場制移行後の不安定で急激なレート変化

覇権の衰退にもかかわらず、レジームは安定的に維持された

「アメリカ覇権安定論」（米国の覇権衰退→国際的レジームの衰退→国際的強調の崩壊）は
なぜシナリオ通りにいかないのか？

- ・ レジームの慣性
- ・ レジームや協力自体が持つ合理性
- ・ 冷戦における敵の存在

→米国への単独覇権主義推進の中、今後この考え方をどう捕らえるか？

【参考文献】

田中 明彦『新しい「中世」』日本経済新聞社（日経ビジネス人文庫） 2003年

小川 俊子『「アメリカの覇権衰退」に関する諸議論』国際研究中部大学 国際地域研究所紀要

小川 俊子『覇権後退期におけるアメリカの対外政策』国際研究中部大学 国際地域研究所紀要